

---

# 春祭り物語

藍霞

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

春祭り物語

### 【Nコード】

N3140G

### 【作者名】

藍霞

### 【あらすじ】

神楽と沖田が、春祭り（お花見）に行きます。前日、当日、後日談として書きます。CPは沖神です！最後に銀時目線が入るかも知れません。

〈前夜祭〉

桜が咲いた。

この地球ほしにきて初めて見た薄紅の花。

蕾は固いまま冬に耐え、暖かな日の中で花になる。

優しい春の太陽は、彼女にも陽ひの下を歩かせてくれる。

熱すぎなくて、痛すぎなくて、丁度いい。

「銀ちゃ〜ん。今年も春祭りがあるネ！」

「春祭り？俺ア、家でドラ ンボールのDVD見るから行かねえよ。」

「え〜！・・・新八！しょうがないから一緒に行くアル！」

「ごめん。神楽ちゃん。明日は姉上の手伝いがあるん・・・」

新八の言葉は、そこで途切れた。

「いいネ！誰も行ってくれないなら、一人で行くアル！」

神楽はそう叫ぶと、見慣れた万屋を飛び出していった。

「神楽ちゃん！！」

「ほつとけ。直ぐ帰ってくる。」

でも・・・という新八の声に重なるように銀時はもう一度呟いた。

「直ぐ帰って来るさ。」

\*\*\*

飛び出した神楽は一人公園のブランコに座っていた。

「銀ちゃんも新八も、ひどいアル・・・」

むしゃくしゃしていたのと、なんだか寂しかったのがごちゃ混ぜになつて神楽は俯うつむいていた。

だから、後ろから声がするまで人がいるなんて気が付かなかった。

「チャイナさんよオ。」

「サド・・・？」

サド。ドS故の呼び名だが、本名を沖田総悟という。

「何してるんですかイ。こんなところに一人で。」

「それはこっちの台詞アル！またサボりか？」

「そう。サボり。」

暇なら明日春祭り付き合うヨロシ、と試してみようとした時・・・。

「明日。春祭り、行きませんか？一緒に。」

「・・・え？」

「だから春祭り。行きませんか？」

「どうしてもって言うなら行ってやるネ・・・！」

「なら、どうしても。」

明日5時に待ち合わせ。嬉しくて、楽しみで、少し恥ずかしくて。

それは、言ったほうも言われたほうも。

「はやく明日にならないかな。」

別々の場所に帰った二人が同じタイミングで、同じ言葉を呟くのは、  
もう少しだけ後の事・・・。

く春祭り開催！く（前書き）

いよいよ春祭りが始まります！

く春祭り開催！く

「サド〜！」

神楽はいつもとは違う着物姿で。

髪も一つにまとめ、赤い鼻緒の下駄のお陰か目線も少し高い。

「ようチャイナ！・・・いや今日はチャイナじゃないな・・・。神楽！」

走ってくる神楽は少し動きにくそうだった。

「慣れない着物着<sup>もの</sup>てるから動きにくいアル・・・。」

独り言で言ったつもりが、聞こえてしまったようだ。

「大丈夫ですかイ？」

「平気アル！さあ行くネ。」

\*\*\*

二人は露天の並ぶ大通りについた。

「うわ〜！すごいアル！」

本当に楽しげにはしゃぐ神楽。思わず飛び跳ねた拍子に下駄が脱げてしまった。

はだしでの着地は思ったより痛かった。

「！」

「神楽！」

いたた、と苦笑いする神楽の前に彼はしゃがむ。

「ん。おんぶ、してやりませア。」

「な何言ってるアルか！」

躊躇う神楽を見て、仕方ないなあという顔を見ると、今度は神楽の後ろに立つ。

「今度は何アルか！？」

そう言った神楽の身体はふわりと浮いた。

「これでどうですかイ？お姫様？なんなら俺はこれでもいいですよ？」

「……！」

「放せッ！」

「じゃ早くのんなせエ。」

顔を真っ赤にさせて、でも嬉しそうに神楽は沖田の背中に負ぶさる。

「最初から素直にそうすればいいんでイ……。」

「うるさいアル……！うるさいアル。総悟は……。」

最後は小さく小さく消えるように。それでも彼には聞こえていた。

「もっと呼んでくだせエ。もっと大きな声でもっと沢山。ねえ神楽？」

「仕方ない奴ネ。総悟は。」

ふっと沖田が黙り込む。

「総悟？どうしたアルか？疲れたアルか？総悟！」

「……神楽が好きだ。」

いきなりそんなこと言われるなんて……！

鼓動が早くなる。おんぶされてたら気付かれちゃうよ。どうしよう！

なんて考えるけど口から出たのは、一言。

「私も総悟が好き！」

さっきよりもぎゅっと、神楽は彼女の愛しい彼に抱きついた。

祭りは、まだまだ続きそうぞ。

桜よりも愛らしく、祭りよりも華やかに二人は笑っていた。

く春祭りの裏側く（銀時目線）（前書き）

銀時の目線です。本編に直接関わる話ではありませんので、番外として読んで下さい。

〈春祭りの裏側〉（銀時目線）

「銀さん、神楽ちゃん本当に一人で行ったんでしょっか？」

「んなわけ、あるか。一人で行くのに着物なんて着るか？」

「そういえばそうですね。．．．でも誰と？」

「神楽もお年頃だもんなア。」

「ええっ！じゃ男の人と？」

「かもね。」

万屋での一幕。結局二人とも、神楽が気になってこんな会話を繰り返している。

神楽がにかけてから一時間ほどたった頃。

「僕、ちよつと見てきます。」

そういつて新八は大通りに向かった。

\*\*\*

万屋に一人残された銀時は少し前に受けた”相談”を思い出していた。

『旦那ア。俺、神楽が好きなんです。だから春祭り、行きたいなあ．．．なんて。』

どうやって誘えばいいかと。真選組の連中には相談できないからと銀時の所にやって来た。

神楽がおめかしして出かけたところを見ると、ちゃんと誘えたようだ。

「やるじゃねえか。サド王子も。」

まあ、あの父親（おとうさん）がそれを知ったら大変だろうけど．．．。

頑張れよ、沖田くん。銀さん応援してやるから。

「若いねえ。青春、青春。」

神楽の保護者ではあるが、沖田の兄貴分のようにでもある。  
かわいい子供と弟分が仲良くなるのは嬉しい事じゃないか。  
銀時は満足げに微笑むと

「俺は綿飴でも、買ってくるかな。」  
と呟き、立ち上がった。

好きな女の一人くらい、守ってやれる男になれ。

好きな女に涙を流させるな、いつも笑顔で居させてやれ。

好きな女は心のそこから、愛してやれ。

そうすれば、そいつはきつとおまえを好きになってくれる。

そうだろ？



神楽は訳が分からなかった。

何が起こっているのか理解できないうちに彼の満足げな声がした。

「ごちそうさん！」

神楽の唇に触れていた自分の唇を、ゆっくりと舌でなぞり

「たまにはこういうご馳走もいいなア。」

「・・・なっ何!?!」

神楽の顔は見事に真っ赤で。

でも「たまにだからな！」と沖田の耳元で囁いた神楽は幸せそうに笑っていた。

貴方が居るこの地球ほしに来てよかった。

貴女の住むこの町に来てよかった。

大好きな君の生きるこの世界に、生きていて本当に良かった

〜そして、幸せの日常〜（後書き）

はじめまして！藍霞と申します。

私の初投稿、如何でしたか？

初めてだったので上手く書けているか分かりませんが楽しんでいただけましたら嬉しいです。

さて、簡単な次回作（予定）の紹介です。

CPはやはり沖神です！（作者はこのCPが大好きです！）私の卒業式がもうすぐあります。ですから、3Zネタで。銀魂高校の卒業式〜な感じですね。

皆様にすこしでも楽しんでいただけるように頑張って執筆致しますので、ぜひ読んでくださいね。

それでは、お付き合いいただきありがとうございます！  
また次の作品で、お会いしましょう。

藍霞

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3140g/>

---

春祭り物語

2010年10月12日03時58分発行